ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.9 September 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

9

CONTENTS

・巻頭言
海外布教の中でぢばを考える③
／永尾 教昭 1

・「おさしづ」語句の探求（48）
「おさしづ」第7巻における個人の身上・事情の伺いと「道」
／澤井 治郎 2

・台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（3）
台湾の族群と歴史の複雑性
／山西 弘朗 3

・日本語教育と海外伝道（38）
日本語教育と異文化伝道③
／大内 泰夫 4

・宗教伝統における聖典の意味構造（8）
シャンカラ派におけるヴェーダ聖典とその伝承
／澤井 義次 5

・イスラームから見た世界（15）
イスラームにおける「他者への献身」②―自発的喜捨（サダカ）―
／澤井 真 6

・コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（39）
民主化への動き
／森 洋明 7

・現代宗教と女性（33）
オリンピックと筋肉的キリスト教
／金子 珠理 8

・ニューヨーク通信（10）
コロナ禍における活動
／福井 陽一 9

・図書紹介（124）
島薗進・鎌田東二・佐久間庸和著『グリーフケアの時代―「喪失の悲しみ」に寄り添う―』
／金子 昭 10

・おやさと研究所ニュース 11

天理台湾学会第30回研究大会、オンラインで開催／第3回 East Asian Society for the Scientific Study of Religion (EASSSR：宗教の科学的研究のための東アジア学会）で発表／第341回研究報告会／2021年度公開教学講座のご案内

巻頭言

海外布教の中でぢばを考える③

おやさと研究所長 永尾教昭 *Noriaki Nagao*

天理教の場合、例えば教会の設立、教会長の交代、教会祭典日の変更等々は、まず教会本部に願書が提出される。しかし事務的に願書や関連書類を提出すれば済むのではなく、教会の代表者らが実際にぢばに足を運ぶ必要がある。そして、ぢばで真柱による「事情運び」を経て初めて許認可される。

そもそも天理教の教会は、教団が教勢の進展を図って戦略的、組織的に各地に設置したというよりは、信者たちが設立したいと本部に願い出て、それを神（存命の教祖）が許可するという順序を辿ってきている。つまり教会は神に許されて設立されたのであるから、教会長の変更等々を人間が勝手にすることができるとは考えないのである。こうした意味で、教団の運営に携わる本部とぢばとは不離一体が理想ということになるのであるが、それは、教会の設立・教会名や会長の交代、神殿や附属屋に関わる「願」の可否は神の裁可によるという信仰があるからだろう。

一方で、例えば仏教でいう本山と末寺の関係は、言わば商業界でいう本社と支社になぞらえることができるだろう。銀行で融資を頼む際、そのオーソライズは本社がするにしても、融資金を受けるのは金額にもよるが近くの支店で事足りる。そもそも支店とは、わざわざ本社に行かなくても済むように、顧客の便宜を図るために置かれるものだ。

末寺であっても同様だろう。本山に行かなくても、同じ宗派ならどの寺でも、信者はいわば同様のサービスを受けることができる。事実、例えばインターネットで「得度したい」と検索すれば、本山だけではなく多くの寺院がその広告を出している。カトリックも同様で、わざわざバチカンに行かなくても洗礼は世界中のどこの教会でも受けられる。

天理教の教祖自身、立教以前、浄土宗の信者として五重相伝を受けているが、それも総本山の知恩院ではなく近在の寺で受けている。五重相伝とは秘儀とされているが「浄土宗の教えを受容したものが、人間の中でも勝れた人という栄誉があるとして戒名にいわゆる『誉』号を許される」ものというから、教理の奥義を究めるものなのだろう。[1] そういう高度なものでも末寺で授かることができる。

しかし、天理教の場合、一般信者がようぼくになるための別席の受講、さづけの拝戴はもとより、お守り、安産の許しである「をびや許し」の拝受など、ぢばでしかなされない。一般教会ではできないのだ。そもそもお守りに至っては、正確には「証拠守り」と言われ、ぢばに帰参した証拠に渡されるものである。

加えて信者が信仰的成人の道程を歩んでいくのにも、ぢば、言い換えれば本部に足を運ばねばならない。ようぼくから「教人」と呼ばれ、また教会長資格を有する立場になるために「事情運び」はないが（つまり教理上、これは人間が作った制度と言えるかもしれない）、そのための講習会や試験も本部でのみなされる。

こういった形は、通常、布教戦略上非常に不利なように考えられなくもない。つまり、わざわざぢばに帰参しなくても各地に存在する教会で信者は信仰の段階を踏んでいける、あるいはお守りなども教会でもらえるといった方が教線が伸びていくのに好都合のように見えなくもない。教会自体も何かの手続きのたびにぢばに帰参し、神の許しを受けねばならないのは非合理的にも思える。しかし現実には、天理教の教勢は、明治時代にすでに朝鮮半島にまで延びている。終戦まで日本の最北端であった南樺太には最盛期で実に55カ所の教会の設置を見ているのである。[2] 他の教団を凌駕する勢いであった。

そして、海外布教の上でこれをしっかりと捉えていくということは重要なポイントとなる。

［註］

（1）若林隆光『わが家の宗教　浄土宗』大法輪閣、2003年。

（2）『第14回天理教統計年鑑』1946年、天理教教務庁調査課。

「おさしづ」語句の探求（48）

「おさしづ」第７巻における個人の身上・事情の伺いと「道」

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

『おさしづ改修版』第７巻・補遺（明治20～40年）における個人の身上・事情の伺いにあらわれる「道」の用例を整理する。第７巻・補遺は、改修版が公刊される際、新たに収集された「おさしづ」がまとめられている。そのほとんどは個人の身上・事情についての「おさしづ」で、明治35年以後のものは少ないのが特徴である。

このなかに、個人の身上・事情の伺いは1,358件ある。そのうち、「道」が用いられるのは629件、３回以上「道」が繰り返し用いられるのは236件である。

第７巻は、明治20年から40年と時間的な範囲が広く件数も多いので、この巻の「道」に共通する特徴を取り出すのは難しい。ただ、今回の対象は、個人の身上・事情の伺いなので、その「おさしづ」の脈絡はさまざまのはずであるが、この巻を通して読むと、「道」を用いて説かれる内容には、時期によっていくつか特徴があることが分かる。以下では、そのいくつかの特徴についてまとめることにする。

独特の用語としての「道」

一つ目の特徴は、時代が経るにつれて、「道」の用例が天理教を表す名詞的な用法になっていくことである。明治20年から25年あたりまでは、「道」の言葉にさまざまな修飾語がつくことが多い。試しに、第７巻に出てくる「道」の用例の最初の10個（明治20年）を列記してみる。

言えばそのまゝ見える道／どういう道／綾や錦仕事に成りてある道／長らえて十分の道／この道／これまで道という／いかなる道／真実道／身の内同じ道／神の道

このように、「おさしづ」で説かれる「道」について、さまざまに説明の言葉が付けられている。個人の人生や、世界にあるさまざまな道とも関連させながら、親神が付けようとしている「神の道」がどのようなものであるか、言葉を尽くして丁寧に説かれている。

しかし、明治20年代の後半になると、そうした「道」の用例は減ってくる。試しに、第７巻に出てくる「道」の用例の最後の10個（明治38～40年）を列記すると次のようになる。

さあ道という／順序の道／道は容易で出けた道やない／道という／道という理／楽しみな道／生まれ更わりという道／道とは／この道

このように、単に「道」と言われることが多くなっている。それまでに説かれてきた「道」の諭しを踏まえ、「おさしづ」を聞く者がすでにその諭しの内容を知っているものとして、特に説明はなくとも、固有の意味を持つものとして「道」が使われるようになっている。ここに、教内において、「道」が天理教の信仰を指す独特の用語として定着してきた経緯の一端をうかがうことができる。

道の順序

第７巻を通読すると、「道の順序」あるいは「順序の道」が強調される時期が二つある。一つは、明治20～22年頃で、親神が付けようとする「道」のために、各人が心に治めるべき「順序」が説かれている。

「いかなる道〳〵、順序々々いかなる道、長らくの処に心を尽し、一つの処順序尽し、どんな順序なら、銘々身の内かりもの八つの道、世界の処へ皆映してある。皆いんねん。いんねんなら世界の鏡に映しある。どんな難儀な〳〵者も皆映してある。これを見て、めん〳〵も一つあんな身ならと思うて一つのたんのうという処、たんのうが誠。心に誠さい定めば、自由自在と言うて置こう。」（さ21・5・一　中西平八長男平次郎二十六才一年前より心間違いで身上願）

このように、身上の伺いに対して、身の内かりもの、いんねん、たんのうという教理を挙げて心に治める順序が説かれ、「心に誠」を定めることを諭される。同様に、道の順序として、心の治め方、誠の心を定めることが、この時期、繰り返し説かれている。

道の順序が強調される二つ目の時期は、明治32～33年頃である。

「精神という方針一つ順序、道のためならどうでも、人のためならどうでも。身上へ掛かる。……元ぢばという、ぢばから出た。それ〳〵この順序、これ一つ一時に成ったものやない。何処から何処まで、所々に名称と言う、元々の理から先々順序集まる順序世上から一つの理、世上にはほんに成程と言う。」（さ32・6・3　加見兵四郎伜秀二郎身上願）

この時期は、一派独立運動が本格化する頃であるが、そうした関連もあってか、各教会の元はぢばにあること、また、教祖はじめ古く道に尽くした人々の苦労があってこその今の教会であるという順序が、繰り返し説かれるようになっている。

道は末代

また、明治30年代になって、「道は末代」ということが、特に何度も繰り返し説かれるようになる。

「一代切りと思えば、何したんと思うは理なれど、この道末代の理。末代所に理のある治まりという。末代理一度も同し事。この理楽しんで運ぶなら、未だ〳〵案じる事要らん。道楽しんで運ぶなら、末代。末代の名が、楽しみやで。」（さ32・10・26　高橋直秀六十才身上願）

これまで尽くしてきた道は消えてしまわないこと、人間は一代で終わりではなく、生まれ更わるのであり、尽くした道は末代まで続くということが、何度も説かれている。それによって、末代までの先の長い生を思い、今の心を治め、道に尽くして先を長く楽しんで通るようにと励まされている。

以上、第７巻における個人の身上・事情における「道」の用例を、いくつかのまとまりに分けて確認してきた。そこでは、明治20～23年頃という最初期に、親神の望まれる「道」を歩む上で、心に治めるべき順序が教えられ、心に誠を定めることが強調されている。その後に続く、教会に関連する順序や「道は末代」ということが強調される際にも、その根本には、「身の内かりもの」の話を聞き分け、誠の心を治めるということを、常に諭されている。

台湾の族群と歴史の複雑性

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
ジュニア・フェロー
山西　弘朗　*Hiroaki Yamanishi*

台湾の族群と歴史

前回（7月号）は、台湾社会の多様性と複雑性の原因は「族群（エスニック・グループ）」と「歴史の複雑性」であることに言及したが、具体的にこの二つの要因がどのように台湾社会で作用しているかについて、とくにその「日本観」に注目して、詳しく分析を試みたい。

台湾社会の特徴を表すキーワードとしてしばしば指摘される「族群（エスニック・グループ）」という概念は、民族に似ているが、厳密に学術用語として民族と呼ぶものではない。ここでは一応、文化的差異によって凝集された集団意識に基づき、歴史経験と社会的境遇によって形成された社会集団と定義しておく。この族群が四つに分類されることからしばしば「四大族群」と呼ばれ、台湾社会においておおむねこのような説明が受け入れられている。

一つ目の族群である「原住民族」と呼ばれる人々は台湾で最初に居住し始めたと考えられているが、この人々は文字を持たなかったため、その開始時期や遷移の詳しい状況は明らかでない。この先住者である「原住民族」は、現在台湾の中央政府が認めている民族だけでも16族に分かれている。言語はオーストロネシア語族に属しているが、それぞれの言語は通じず、社会構造なども大きく異なり、多種多様である。先住者としての社会的境遇や言語の類似性、粟を主食にした焼畑や狩猟生活など生業の共通点から、一つの「族群」として捉えられている。

この「原住民族」が暮らす台湾へ、17世紀から18世紀にかけて中国大陸の広東、福建から大量の人々が移り住んでくることとなる。台湾西部の開拓を進め、稲作の農地を拡大し、原住民と抗争や交渉を繰り返し、その勢力範囲を広げていった。彼らは使用言語、出身地やその習俗の違いから、中国語の方言である閩南語（台湾では「台湾語」と呼ばれることが多い）を話す「和佬（ホーロー）人」と客家語を話す「客家（ハッカ）人」の二つの族群に分類される。この二つの族群はともに漢族であるが、お互いに異なる「族群」意識が形成、強化されることとなった。これら三つの族群が200年ほど交流や抗争を繰り広げながら、台湾社会の基礎を形成していくこととなった。

この三つの族群が暮らす台湾に、植民者として日本が出現した。1895年に日清戦争の勝利によって日本の新しい領土となった台湾を統治下におき、植民地となった台湾へ新しい統治者として日本本土から渡って人々が加わることで、それまでの族群関係に影響を与えることとなる。しかしこの当時「内地人」と呼ばれた人々とその子孫は、第2次世界大戦の敗戦により、すべて日本へ引き揚げて姿を消すこととなった。それに代わって、新しい統治者として中国大陸から渡ってきたのが、中国国民党（以下、国民党）による国民政府である。中国大陸における国共内戦もあり、この国民党とともに渡ってきた人々は「外省人」と称される族群に分類される。彼らの出身地は中国全土に及び方言や文化も異なっているが、台湾へ渡ってきた時期や台湾での社会的立場（統治構造において優位な地位の者が多い）から、一つの族群として捉えられることとなった。

台湾の日本観

ここまで紹介してきた四つの族群は、それぞれの人口に占める割合や（圧倒的多数を占める「和佬人」と少数者であるその他の族群）、歴史経験に影響を受けながら族群意識が形成されることとなった。例えば、前者の三つの族群は50年にわたる日本による統治を経験し、国語としての日本語や日本人としての自己認識、道徳倫理などの教育を受けていることから、それに対する反応や評価の差異はあるにせよ、歴史経験の共通点がある。（「和佬人」と「客家人」を合わせて「本省人」と総称される）。それに対して第2次世界大戦後に台湾へ渡ってきた「外省人」にとっての日本は、日中戦争を戦った敵国であることから、前者の三つの族群とは大きく異なる文脈による「日本観」を持っている。

前者の三つの族群の日本観について、重要なことは日本統治とその後の国民党による統治を比較する視点を持っているということである。日本による統治も初期にはさまざまな抗日運動や武装蜂起とそれに対する武力制圧があったものの、統治期間が長くなるにつれ、教育制度や社会インフラ整備が進むことで社会が安定し、生活水準も向上していった。これに対して国民党による統治は、1947年に勃発した本省人と外省人の対立を決定的にする二・二八事件及びその後38年間にわたって続けられた戒厳令による政治的抑圧、また統治者としての優位的立場を悪用した不正や腐敗など厳しい社会状況が続いた。そのために、日本の統治を国民党のそれより良かったと主張する人々も多い。

ただ、「客家人」は「和佬人」に対して少数者であるため、「和佬人」の台頭を牽制する意図や、中国大陸にある出身地（「原郷（ユエンシャン）」と呼ばれる）意識に根差した強い中国主義意識を持つという共通点がある「外省人」や国民党に対して、親和的態度を取る傾向も指摘されている。これらの族群と比較して、圧倒的少数者である「原住民族」は、日本、国民党、民進党へと統治者の変化に翻弄されながらも、その実利的、現実的側面を重視したやや冷めた眼差しで、それぞれの統治者を比較しながら、自らの先住者としての立場を考慮した族群意識が近年形成されてきているように筆者は感じている。また、これまで言及してきた族群意識は世代を重ねることで希薄化してきていることも事実で、それぞれの言語を使用しない若者世代が増加することで、その傾向に拍車をかけている。

しかし全般的に見れば、日本による戦前の植民地統治、この日本統治の残滓を一掃しようと進めた戦後の統治者の国民政府による「脱日本化」、そして1980年代後半以降の民主化など急激な変化を生じさせた「歴史の複雑性」を経ることで、族群意識の形成や強化が促され、これが台湾の日本観にとって大きな要因となってきた。このことは、次回から検討する台湾における天理教伝道史の重要な社会的背景となっている。

［参考文献］

黄智慧 2009「台湾における日本観の交錯―族群と歴史の複雑性の視角から―」『日本民俗学』259:57-81。

日本語教育と異文化伝道 ③

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

CA と AL

日本語教育関係者なら、すぐにピンとくるアルファベットだが、「キャビンアテンダント」と「エアライン」というような航空関係の話ではない。「CA」というのは「Communicative Approach」、「AL」というのは「Audio-lingual method」の略である。この二つが日本語教育の世界では何度となく論争を巻き起こしていた。筆者が日本語教育に携わり始めた 1980 年代中頃以降、「コミュニカティブアプローチ」という言葉が盛んに言われるようになった。従来からあるオーディオリンガル法に取って代わる新しい教授法のように思われてもいた。厳密には「アプローチ」と「メソッド」という違いもあり、比較すべきものでもないのかもしれないが、「CA」の波は当時、日本語教育界に大きな影響を与えていた。まるで江戸末期に来た黒船のような印象だと言っても過言ではない。なぜなら今まで積み上げてやってきたことが否定され、これこそ新しいやり方だというような風潮があったからである。

これはえんぴつです

今どき、「This is a pen.」で始まる英語教科書はないと思うが、読者の皆さんは次の主張をどう思うだろうか。

- そんなのは実際の会話では使うこともない文だ。それを何度もリピートさせられて英会話が一つもできなかった。
- 目の前に鉛筆があり、話し手も聞き手も鉛筆であることを認識し、話し手が鉛筆を手に取って、聞き手に対して「これはえんぴつです」と言うのは不自然だ。
- 「これはえんぴつです」は構文を示すための文であり、「えんぴつ」の部分を「田中さんの鉛筆」とか「図書室の本」というように入れ替えれば、充分に会話の中の文として成立するから、不自然でも何でもない。
- 先生の指示に従って、反復、入れ替え、拡張、応答というような練習ばかりしていても反射的に反応する練習ばかりで、実際に話せるようにはならない。自発的に文を作って話すわけじゃないから会話では役に立たない。
- コミュニカティブな授業とはいうが、基礎的な単語や構文をしっかり練習して積み上げていかなければ、間違いだらけの文しか言えなくなるではないか。

どれもこれも一理あるようで、自分の英語学習の経験なども踏まえて考え込んでしまうことばかりではないだろうか。以前、この連載の中で LL(Language Laboratory) や文型積み上げ式の授業について述べ、留学生から「学校では先生の日本語がよくわかるけど、一歩外へ出たら日本人の話す日本語がわからない、習った日本語が使えない」と言われたエピソードを紹介したが、その経験からも「CA」に関しては関心を持たざるを得なかった。

パリでの経験

1990 年にパリへ派遣された時、生活に必要な会話ぐらいはできるようにアリアンス・フランセーズに通わせてもらった。ヨーロッパでは「CA」は語学教育ですでに取り入れられていたようだが、教科書にはカラフルな絵や写真がたくさん取り入れられ、場面に応じて必要な会話が書かれており、わかりやすく自然な形で流れていくような印象があった。これが CA 的なものなのかとも思っていた。当時、日本語教育ではこのような教科書はあまりなかったようにも思う。どちらかといえば文字中心で語彙や文型、そして漢字、それらがちりばめられたダイアログなどで構成されているものが多く、挿絵などが時々入るぐらいだったように記憶している。２年後に帰国してからも日本では「CA・AL 論争」が続いていた。しかし、「CA」に関しては具体的な教科書、教材などはたくさん開発されていたわけでもなく、理論的なことばかりが取り上げられていたような印象が強かった。学会などで論争されていただけでなく、多くの日本語教育機関の教師同士の間でも「プチ CA・AL 論争」が行われていたのではないだろうか。

教科書批判

筆者がパリで『日本語の基礎』（スリーエーネットワーク）を使い、授業を行っている頃、日本では「CA」の台頭から、「AL」に対する批判があり、その代表的な教科書として『日本語の基礎』が批判の対象として挙げられていた。『日本語の基礎』は実習に来た技術研修生のための教科書であり、語彙の面などで確かに一般の日本語教育には適さない部分もあったことは認めるが、研修生が限られた期間で効率よく学んでいく上では非常に優れた教科書である。だからこそ多くの日本語教育機関で採用され続けてきたのであろう。この教科書批判については、松岡弘・五味政信編著『開かれた日本語教育の扉』（スリーエーネットワーク、2005 年）の中で、鶴尾能子氏が詳細に書いているが（59～60 頁）、当時、「CA」側からの批判はちょっと一方的なものだと筆者も感じていた。実際に『日本語の基礎』の開発に携わってきた人々にとっても、この批判は衝撃的なことだったと思う。しかし、この論争があったからこそ、多くの日本語教師が教授法について深く考え、自分の実践についても振り返ることができたともいえる。そして『日本語の基礎』は見直されて、『新日本語の基礎』に、そして技術研修生だけなく一般向けとしてもさらに進化し、『みんなの日本語』として生まれ変わった。

共生的進化

教科書批判で思い出したことがある。遺伝子研究で有名な故村上和雄氏は「生きとし生けるものは、すべて『我が身かわいい』んです。『我が身をかわいがること』に対して貪欲であっても、いいんだと思います。しかし、それが限度をすぎ、全体のバランスが崩れた時、自分自身もイキイキできなくなる時が来ます。」と述べている（『遺伝子からのメッセージ』日新報道、1996 年、82 頁）。村上氏はまた、ダーウィンの進化論に対抗して出てきた共生的進化論を引用して、遺伝子の観点から、「共同・共生」「個性化・個別化」「闘争・競争」して、発展向上していくものだとも述べている。社会や組織も、仲間内だけで「助け合い」をしているのはよいが、あまりにそれが長く続くと、いつしか「もたれ合い」になり、競争のないイキイキしない社会になり、「平等」がいつしか単なる「横並び」になり、個性のないものばかりになってしまうと述べている。その時、競争や闘争が必要になるが、一方で「競争」ばかり続けていると、今度は「譲る心」のない殺伐とした社会になっていくともいう（84 頁）。村上氏が言うことは、教科書や教授法にも、学校という組織にもあてはまりそうだ。これらが発展するためにはバランスのとれた共生的進化が必要ではないだろうか。

宗教伝統における聖典の意味構造（8）

シャンカラ派におけるヴェーダ聖典とその伝承

天理大学名誉教授
おやさと研究所嘱託研究員
澤井　義次　*Yoshitsugu Sawai*

インド社会では、19世紀にイギリスの統治のもと、近代学校制度が導入されるまでは、「パータシャーラー（学校）」と呼ばれるヒンドゥー教の伝統的教育の場があった。しかし、西洋的教育の普及に伴い、伝統的教育は衰退の道を辿ったが、現在もなお、シャンカラ派などのパータシャーラーでは、伝統的な教育がおこなわれ、「語られる聖典」としてのヴェーダ聖典が伝承されている。今回は、ヴェーダ聖典の中でも、特にウパニシャッド聖典の解釈学として展開したヴェーダーンタ哲学をめぐって、シャンカラ派の伝統的教育の一端に注目し、ヴェーダ聖典の口頭伝承の特徴を論じてみたい。

シュリンゲーリ僧院の伝統的教育

インド最大の哲学者と言われるシャンカラ（約700～750）の不二一元論哲学は、今日でもインド知識人に大きな影響力を及ぼしている。シャンカラはシャンカラ派の総本山、シュリンゲーリ僧院を開創したと信じられている。シャンカラ派は中世以後、インド思想界に圧倒的な勢力を保持してきた。カルナータカ州の山奥に創設されたシュリンゲーリ僧院は、わが国では、空海が都から遥か離れて、真言密教の根本道場を設けた高野山を想起させる。空海の思想がシャンカラのそれと類似していることは、比較宗教学的に興味深い。

シャンカラ派の伝統では、ウパニシャッド聖典は本質的に「ブラフマンとアートマンの一体性（梵我一如）」の真理を教示すると説く。シャンカラ派僧院では、ヴェーダ聖典の伝統的教育がおこなわれ、学生期にある約70名の子どもたちがヴェーダ聖典を学習している。ヒンドゥー教では、伝統的に四住期（āśrama アーシュラマ）と呼ばれる4つの生活期、すなわち学生期、家住期、林住期、遊行期が設けられてきた。そのライフ・モデルによれば、人生は全体としてブラフマン（梵）の探求に向けられ、師の家に住み込んで、ヴェーダ聖典の学習に励む時期（学生期）に始まり、ヴェーダ聖典の学習を終えて、生家へ帰り、結婚して家庭生活を送る時期（家住期）、さらに家業を引退して森で暮らす時期（林住期）を経て、出家遊行して解脱を求める時期（遊行期）という4つの生活期からなる。古代インドにおいて、この四住期がどの程度までおこなわれていたのかは明らかでないが、現在でも、多くの人々がこうした生き方を理想としている。

「聴聞・思惟・瞑想」の階梯

シャンカラ派の伝統では、ヴェーダ聖典の学習について、「聴聞」(śravaṇa)、「思惟」(manana)、「瞑想」(nididhyāsana) の三階梯を継承してきた。「聴聞」とは、弟子が師からヴェーダ聖典、特にウパニシャッド聖典および師の言葉を聞くことであり、「思惟」は師から聴聞した内容について、弟子が自らの思索を深めることである。さらに「瞑想」とは、師との討論によって到達した聖典の要点を、弟子が繰り返し反復することを意味する。弟子は心の深みを開き、ブラフマンの知識を獲得して、究極的に解脱に到達することを目指す。シャンカラ派では、この三階梯の中でも、聖典の「聴聞」が重視される。(1)

「聴聞・思惟・瞑想」の階梯は、古ウパニシャッドの時代にすでに確立されていたわけではない。それはヴェーダーンタ哲学者たちが後にウパニシャッド聖典の中に、この三階梯を読み込んで解釈したものである。古ウパニシャッド聖典には、たとえば、学生期の少年がヴェーダ聖典を学習する話が、父子の対話の中に記されている。それは『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』第六章における哲人ウッダーラカとその息子シヴェータケートゥとの対話である。(2) 息子のシヴェータケートゥは、12歳になったとき、師に弟子入りし、24歳で全てのヴェーダを学習し終える。そのことから、つい傲慢になり、自分では聖典に精通したと自惚れて、意気揚々として家に帰ってくる。このことは、師のもとでヴェーダ聖典を学習して、学生期を終えたことを示唆している。息子のシヴェータケートゥは師からヴェーダ聖典の言葉を学んで、聖典を暗唱し終えているが、父親ウッダーラカの目からみれば、息子はいまだヴェーダ聖典をよく理解してはいない。

そこでウッダーラカは、息子に次のように尋ねる、「それによって、いまだ聞かれなかったことも聞かれたことになり、いまだ考えられなかったことも考えられたことになり、いまだ認識されなかったこともすでに認識されたことになるような、あの教え（ādeśa）を〔先生に〕尋ねたのか」。息子は答える、「いったいその教えとはどのようなものですか」。父親のウッダーラカは、その教えとは「有」(sat) の一元論、すなわち万有がそのまま絶対者ブラフマン（＝アートマン）であることについて詳説する。ウッダーラカは「この微細なもの―この一切はそれを本性としている。それは真実である。それはアートマンである。シヴェータケートゥよ、汝はそれなり」と説く。父親のウッダーラカは息子との対話の中で、この同じ言葉を9回繰り返す。この同じ言葉の中で語られる「汝はそれなり」(tat tvam asi) は、シャンカラ派伝統では、「われはブラフマンなり」(ahaṃ brahmāsmi) とともに、ウパニシャッド思想を端的に教示する神秘的文章 (mahāvākya「大文章」) として知られる。「汝はそれなり」とはシャンカラの注解によれば、「ブラフマンがアートマンに他ならないということ」(brahmātmabhāva)、すなわち「ブラフマンとアートマンの一体性（梵我一如）」を教示するものである。(3)

ちなみに、ヴェーダ聖典の「聴聞・思惟・瞑想」という三階梯の典拠は、伝統的に『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』に見いだされる。

> ああ、実にアートマンこそ、見られるべきもの、聞かれるべきもの、思惟されるべきもの、瞑想されるべきものである。マイトレーイーよ。ああ、まことに、アートマンが見られ、聞かれ、思惟され、瞑想されたとき、この世界のすべてが知られるのである。(4)

このウパニシャッド聖典の文章は、後代のヴェーダーンタ学派の哲学者たちによって、「アートマンこそ、見られるべきものである。すなわち、聞かれるべきもの、思惟されるべきもの、瞑想されるべきものである。」として解釈された。この聖典解釈にもとづき、「聴聞・思惟・瞑想」の三階梯が確立されたのだ。シャンカラは「聴聞・思惟・瞑想」の階梯を達成することで、ブラフマンが直観されると言う。シャンカラ派の伝統において、ヴェーダ聖典、特にウパニシャッド聖典が師から弟子へ、父から子へと世代を超えて口頭伝承されてきた背景には、シャンカラ派の開祖と言われるシャンカラへの人びとの信仰があった。

［注］

（1）詳しくは、拙稿「シャンカラ派における聖典の言葉と修行階梯」『印度学仏教学研究』第67巻第2号、日本印度学仏教学会、2019年、272～279頁を参照。

（2）*Chāndogyopaniṣad*, in *Ten Principal Upanishads with Śaṅkarabhāṣya*, edited by Śrī Govinda Śāstrī Tippaṇi, (Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit, vol. 1. Delhi: Motilal Banarsidass, 1978), VI.i.1-VI.xvi.3, pp. 503-540.

（3）Śaṅkara, *Brahmasūtrabhāṣya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1980), I.i.4, p. 64.

（4）*Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, in *Ten Principal Upanishads with Śaṅkarabhāṣya*, IV. 5. 6, p. 941. Cf. *Bṛhadāraṇyakopaniṣad*, II.4. 5, p. 760.

イスラームにおける「他者への献身」②―自発的喜捨（サダカ）

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

天理教災害救援ひのきしん隊

明治24（1891）年10月28日、濃尾大地震が発生した。この地震の規模はマグニチュード8.0であり、日本で当時観測された最大規模の地震であった。天理教の災害救援活動はこの震災を契機に始まった。その後も、災害救援活動は、関東大震災や阪神・淡路大震災をはじめ、毎年のように日本各地で起こる災害に対して、今日まで途切れることなく続けられている。

さらに、昭和46（1971）年には、天理教災害救援ひのきしん隊（災救隊）が発足し、全国の各教区（都道府県）に教区隊が結成された。今年2021年は、災救隊の発足から50年という節目を迎えている。

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、災救隊は地震発生直後に被災地へ赴いている。本部長（当時）を務めた田中勇一氏は、災害救援の前線に立った責任者である。田中氏は、天理教における「ひのきしん」とボランティアの違いを、天理教の教えに照らして次のように述べている。

> ボランティアはひと言で申せば、人間の行為としては最高の善意の行為であります。ですが、人の善意というのを受ければ、人は普通「ありがとう」と答えるものです。仮にこの「ありがとう」という返事がなかったら、少し喜べなかったりするのかも知れません。片やひのきしんは、日ごろのいただくご守護に対する感謝の気持ち、親神様へのお礼の態度ですから、ひのきしんをして、お礼を言われればお礼にならないので、できるだけお礼を言われないようにする。むしろ、こちらからひのきしんをさせていただけたことを相手にお礼を言って帰ってくる。言葉の使い方もはっきり言って全く違う。[1]

ひのきしんとは、日々、親神に生かされて生きていることへの感謝を自らの行動や態度で表現することである。すなわち、日常の“生き方”や行動に関わっている。確かに、他者から見れば、ひのきしんもボランティアも見かけは同じであるが、「させていただく」という「親神様へのお礼」というひのきしんの態度は、ボランティアと明らかに異なる。

イスラームにおける自発的喜捨

信仰上の義務的喜捨（ザカート）に対して、自発的な喜捨は「サダカ」（ṣadaqah）と呼ばれる。「ザカート」と「サダカ」の語は、いずれもクルアーンに登場している。義務的喜捨（ザカート）は、礼拝の語とともに用いられる点で、ムスリムとしての信仰的義務の文脈で論じられる。それに対して、自発的喜捨（サダカ）は、「自発の喜捨」（ṣadaqat al-taṭawwuʿ）や「義務以上の喜捨」（ṣadaqat al-nafl）として論じられるように、通常以上の他者への布施や施しを指す。

> 神は、利息（への恩恵）を消滅し、自発的喜捨（ṣadaqāt）には（恩恵を）増加してくだされる。神は忘恩な罪深い不信仰者を愛されない。（Q2:276）

クルアーンでは利息を得ることが禁止されているが、これは他者から不当に暴利を貪ることを禁止していることを意味する。したがって、イスラームにおける金融現場では利息ではなく、手数料として処理するなどの対策が取られる。それに対して、自ら進んで他者への献身を行う者に対して、神は恩恵を与える。この恩恵の延長線上には、来世において楽園（天国）へ行くことができるという考え方がある。

2011年4月13～14日、東日本大震災で被災者支援にあたる日本トルコ文化協会のムスリムたち
（http://www.nittokai.org/report/detail6.html）

「そうしないではいられない」―ムスリムの震災支援

東日本大震災は、15,000人を超える死者を出す未曽有の大災害となった。一般のボランティアのほかに宗教者も被災地へ多く駆けつけ、被災者に寄り添った。それとともに、宗教団体は連携しながら被災者支援にあたってきた。被災地へ駆けつけた宗教者のなかには、もちろんムスリムの姿もあった。

『現代宗教2015』では、被災者への炊き出しを行ったムスリムNGOの一つ、ジャパン・イスラミック・トラスト（JIT）で活動するムスリムたちへのインタビューを掲載している。そこでは、被災地へ赴いたムスリムたちの被災者支援への心情が採録されている。

すでに述べたように、ムスリムの自発的喜捨は神からの恩恵を導く。しかし、ムスリムたちは神からの褒美を求めて被災地へ向かったわけではなかった。ある日本人ムスリムは、インタビューのなかで次のように述べている。

> 私の場合は日本人ですから、アッラーがそういう風にやると褒美をくれるということよりも自分の気持ちがおさまるから。そうしないではいられない。情けないかな、アッラーのことまで気がつかないでいるっていうのが本音ですね。[2]

震災ボランティアに際して、この日本人ムスリムは、自発的喜捨を通して神の褒美を求めて活動したわけではなかった。一人の人間として、少しでも被災者の役に立ちたいという考えであった。

「させていただく」と、「そうしないではいられない」という2つの言葉のなかには、宗教の違いを超えて、人のたすけを願う信仰者としての生き方が現れている。

［註］

（1）田中勇一「天理教災害救援ひのきしん隊の活動」天理大学おやさと研究所編『東日本における天理教の救援』、天理大学おやさと研究所、2012年、77頁。

（2）「ムスリムはなぜ東北に向かったのか」『現代宗教2015』国際宗教研究所、2015年、233頁。

［参考文献］

金子昭『駆けつける信仰者たち―天理教災害救援の百年』、天理教道友社、2002年。

Makoto Sawai, “Salvation Through Saving Others: Toward a Tenrikyo-Muslim Comparative Theology for Japan Today,” *International Journal of Asian Christianity* 3-2, 2020, pp. 211–223.

民主化への動き

国際学部教授
おやさと研究所兼任研究員
森　洋明　*Yomei Mori*

フランスのナントは、アンリ4世が発布した「ナントの勅令」（1598年）で有名なところで、世界史では必ず出てくる地名である。しかしこのナントが、実は大西洋奴隷貿易が進められるなかで、フランスの奴隷船の寄港地として発展した都市であることは日本では知られていないのではないだろうか。

ナントから少し西側のロワール川河口付近に、ラ・ボール（la Baule）というきれいな海岸線を有した、ブルターニュ地方で大変人気のリゾート地がある。1990年6月20日、そこで16回目となる「フランス―アフリカ首脳会議」が開催され、アフリカから37ヵ国が参加した。当時のフランス大統領はフランソワ・ミッテラン。集まった首脳たちを前にして彼が訴えたのが、アフリカの民主化だった。そしてこの時の演説が、90年代のアフリカの政治の方向性の転機となったのである。

1989年11月、ベルリンの壁が壊されたことをきっかけに、共産主義社会の崩壊が始まった。この出来事はヨーロッパとアフリカの関係にも大きな影響を及ぼした。とくに植民地の宗主国から脱却して、共産主義に傾倒していったサハラ以南のアフリカ諸国にとって、ソ連という大きな後ろ盾をなくしたことは大きな問題だった。慢性的な経済停滞にあえぐアフリカ諸国にとって死活問題でもあっただろう。その一方で、フランスにとってこの状況は、アフリカの旧植民地における存在感を取り戻す好機でもあった。ミッテラン大統領は、アフリカの首脳たちに次のように訴えた。

> 民主主義といえば、その要素は代表制や自由選挙、複数政党制、言論の自由、法の独立、検閲の拒否である。
>
> 自由な国民よ、私が敬意を表するアフリカの独立国よ、自分たちでそれぞれの道を選び、そしてその歩みを踏み出すことを定めるのはあなたたち自身なのだ。

彼の演説は国の自決権を尊重しながらも、国民選挙もない一党独裁政治体制を全面的に否定し、民主主義へ誘うものだった。そして、アフリカの民主化をより決定的にするために、経済援助をちらつかせていたことも重要なポイントである。実際、彼は演説のなかで「より自由な方向へ向かっていくために努力するなら、フランスは支援への尽力を惜しまない。アフリカの国々に対してフランスが援助するのは当然のことであるが、その援助は独裁的な振る舞いをする人たちに対しては冷めたものとなり、勇気をもって民主化へ向かう歩みを進める人たちに対してはより熱いものとなるだろう」と続けた。独裁政治を進めてきたアフリカの首脳たちは、この「要求」を受け入れる以外の選択肢がなかったと言えるだろう。

こうして90年代、アフリカの多くの国が民主化へと方向転換していくことになる。共産主義を標榜していたコンゴももちろん例外ではなかった。ただ、その後に辿っていくことになるコンゴの歴史を見れば、それは国が混乱する序章にしか過ぎなかったと見ることもできよう。

ラ・ボールの演説を受けてコンゴでは1990年12月、単独政党であったコンゴ労働党が民主化に移行することを決定した。そのための暫定的な政治体制を敷き、複数政党制を宣言、そして国民議会選挙を1992年3月に開催することを決定した。

その準備段階として1991年2月から6月にかけて、最高国民会議（la Conférence nationale souveraine）が招集された。約1,000を超える政党や政治結社が一堂に会した会議で、まず「最高国民会議」自体が承認され、新たに暫定的な長としてイエズス会派のコンボ司教（Mgr Ernest Kombo）が選出された。4カ月にわたる会議のなかで、これまでの国のさまざまな出来事や政治のあり方などに対する批判がなされた。大統領暗殺やクーデター、政治犯の扱いなどそれまでは公言できなかったことが公の場で議論された。そして独裁体制時の憲法を破棄することを決定した。6月には新たな憲法によって複数政党制の導入を決めていった。また、アンドレ・ミロンゴ（André Milongo）が暫定的ではあるが、実質的な首相に選出された。彼はフランスの国立行政院出身のエリート官僚で、世界銀行にも勤めた国際派である。

軍もこの民主化への移行を支持しており、「軍は一つの政党や個人を支持するのではない」との声明を出し、行政への関与を否定した。ただ、こうした姿勢を懐疑的に見る人たちも少なくなかったようだ。これまで政治体制と緊密な関係にあったことだけでなく、将校はサス＝ンゲソ大統領と同じく北部出身の部族で占められていたので、そのほとんどが南部出身で構成されていた暫定政権にとっては憂慮すべき問題でもあった。

実際に1991年6月にはクーデターの噂が広がった。首相の周辺では軍にその関与の疑いがあるとみなし、首相はコンゴ労働党寄りの将校たちの一掃を試みるが、軍と対立することとなり、協議の結果、新たな政治体制が組まれるまでは、こうした軍の「掃除」は行わないことで一致した。

民主化への移行のなかで山場となったのが、新憲法承認の国民投票である。ただ、新憲法が承認されることには大きな問題はなかった。なぜならすべての党派がすでに賛成を表明していたからである。それよりもむしろ、投票のシステムを構築することが大変な作業だった。また、さまざまな党派が誕生したが、政治理念ではなく部族的な集まりという色彩が強かったことも懸念される材料だった。

国民投票の投票率は70％。大きな混乱もなく投票は行われた。結果は96％の支持を得て、新しい憲法は承認された。コンゴ独立以来6番目となる憲法の制定である。こうして民主選挙がいよいよ実施されていくことになった。

現在、奴隷の拠点であったナントでは、ブルターニュ公爵城（Château des ducs de Bretagne）が博物館となり、奴隷貿易に関する展示が行われている。また、2012年には奴隷制廃止を記念したモニュメントが完成した。2,000枚のプレートで三角貿易の様子が説明されている。今年5月10日には、仏領ギアナ選出の議員によって提案された「奴隷貿易・奴隷制および奴隷制廃止の日」の制定20周年を祝う催しがあり、モニュメントがあるパリ市内の公園でマクロン大統領も出席して式典が行われた。昨年のアメリカでの黒人差別事件以降、ヨーロッパでは奴隷貿易など過去を見直す動きは多く見られるが、このラ・ボールでのフランス大統領の演説も、アフリカの民主化を決定的にしたという点では歴史に残る出来事だったと言えるだろう。その結果として、急速に民主化が進められたことも、いずれまた再考すべき出来事であるのかもしれない。

オリンピックと筋肉的キリスト教

おやさと研究所
天理ジェンダー・女性学研究室
金子　珠理　*Juri Kaneko*

ジェンダー政治のアリーナ

本稿が公表される頃には、コロナ禍で開催が危ぶまれる中、変則的な形で開催された2020オリンピック・パラリンピック東京大会は、閉幕を迎えているだろう。健闘された選手の方々には拍手を送りたいが、宗教とジェンダーの視点からの考察も必要である。

2020東京大会に限らず、オリンピック一般についての批判研究は、北米のスポーツ社会学を中心に、これまで多くの蓄積がなされている。たとえば、ヘレン・ジェファーソン・レンスキーは著書『オリンピックという名の虚構』(2021年)において、その問題点を以下のように指摘している。招致過程における不正、世界規模の他の競技大会とも共通する商業主義、環境破壊、生活破壊（ホームレスなど弱者の排除）、残される多大な負債（東京大会の場合、果して「復興五輪」の理念はどこへ行ったのであろうか？）、ナショナリズム、植民地主義、さらに性別二元論への著しい固執、同性愛嫌悪、トランスジェンダー選手の排除、それらに伴うハラスメントや人権侵害などである。オリンピックは、まさにジェンダー・セクシュアリティ・ポリティクスのアリーナの様相を呈してきたといえる。

2014年のソチ冬季五輪直前に、ロシア議会による「反同性愛プロパガンダ法」可決に対する抗議運動が起き、結局、オリンピック憲章の差別禁止条項に「性的指向」がようやく加えられたのは、大会終了後であった。

また、陸上女子800メートルで五輪2連覇を達成したキャスター・セメンヤ選手（南アフリカ）は、テストステロン（男性ホルモン）値が高い、高アンドロゲン症の女子選手とみなされ、その出場資格を制限する世界陸連の規定の撤回を求めて、欧州人権裁判所に提訴した。筋肉や骨格の成長を促す同値が高い選手に対し、世界陸連は薬などで基準内に収まるように求めたが、セメンヤ選手はそれを拒否し、2020東京大会に向けては、別の種目での参加を目指した。一方、2019年4月、世界医師会の評議会は、高アンドロゲン症規定の即時停止を求め、世界の医師たちに、同規定に基づいた検査や非倫理的「治療」を行わないように呼びかけるなど、徐々に変化も起こりつつある。

とはいえ、「男っぽい女子選手を探せ」という詮索的眼差し、同性愛指向の選手に対するバッシングは、完全に払拭されているとは言い難い状況である。オリンピックのみならず、井谷聡子が述べているように、「近代スポーツは厳格な性別二元論の上に成り立ち、強固な男性支配が続く保守的な文化、空間、機関である。優生思想を簡単に内包し、競争原理で人を階層化する究極的な文化装置でもある」（井谷2021）。

キリスト教の「女性化」への反動

近代オリンピックの父、クーベルタンの銅像が、2020東京大会を契機に、都営霞ヶ丘団地（新宿区）跡地に設置された。クーベルタンはミソジニストとしても知られているが、実際、オリンピックでは、女性の参加は歴史的に厳しく制限されてきたのだった。そのクーベルタンのスポーツ教育思想とオリンピズムに影響を与えたものの一つとして、「筋肉的キリスト教」が指摘されることが多い。

そもそも、19世紀中頃のイギリスのパブリックスクールにおいて、運動競技を正当化する根拠として用いられたのが「筋肉的キリスト教」であった。この思想は本国よりもアメリカで隆盛をみることとなる。従来のキリスト教では、強健な身体と霊的神聖さとは相容れないものとみなされていたが、他者への奉仕や社会改革への参加が説かれる「第二次大覚醒」（1800～1830年代）を契機に、身体的健康は成功のために不可欠であるという評価へと次第に変化していったといわれる。

クリフォード・パトニーは、アメリカにおける筋肉的キリスト教を、19世紀後半のキリスト教の女性化に対する反動と見なしている（Putney 2001）。ちょうどその頃、宗教的指導者の女性化（feminization）現象がみられ、それに対する男性的反動が起きたという。男性たちがビジネスでの成功を目指すようになっていくのに対し、次第に教会のリーダーシップは女性たちの手に渡っていったのである。統計的信憑性はともかくとして、1870年から1900年の間に、女性の聖職者が67名から3,373名に増加したとの記録もあるという（森本2012）。こうした「男らしさ」の危機に、男性的なキリスト教の復興が目指され、男らしさを求めた人々はスポーツを始めたのであった。スポーツはまた、教会から遠ざかっていた青年を再び引き寄せる役割も担っていた。そして、筋肉的キリスト教は、YMCA（キリスト教青年会）の諸活動に体系化されていくこととなる。国によっても異なるが、たしかに今でもYMCAにはスポーツクラブのイメージがあり、また女性版のYWCAでもスポーツや野外活動が盛んに行われている。

やがて、筋肉的キリスト教は世界的に広がり、近代アジアの形成にも影響を及ぼしていった（ヒューブナー2017）。日本では、新渡戸稲造による武士道とも結びついて、独自の展開を遂げていく。さらにクーベルタンを通して、近代オリンピックの理念に結実するのだが、筋肉的キリスト教の出発点が、パトニーの言うような「教会の女性化」への反動だとすれば、オリンピックにある性別二元論やトランス排除・女性排除的体質にも頷ける気がする。レンスキーも言うように、女性のスポーツへの参加が、「男のヘゲモニーが依拠する男女間の『自然』な境界線を不明瞭にする可能性を秘め、それゆえに家父長制社会の脅威となる」のかもしれない。

［参考文献］
森本あんり『アメリカ的理念の身体』創文社、2012年。
松下大樹「健康の殿堂―19世紀後半アメリカにおけるYMCAと筋骨たくましいキリスト教」（修士論文）、早稲田大学、2015年（https://www.waseda.jp/tokorozawa/kg/doc/50_ronbun/2015/5014A034.pdf）。
シュテファン・ヒューブナー『スポーツがつくったアジア―筋肉的キリスト教の世界的拡張と創造される近代』一色出版、2017年。
ヘレン・ジェファーソン・レンスキー『オリンピックという名の虚構』晃洋書房、2021年。
井谷聡子『〈体育会系女子〉のポリティクス』関西大学出版部、2021年。
Clifford Putney, *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America 1880-1920*, Harvard University Press, 2001.

コロナ禍における活動

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井　陽一　*Yoichi Fukui*

オリンピックが開幕した7月23日、マンハッタンの中心部にあるロックフェラーセンターの前には大きな五輪の輪が設置され、東京オリンピックの開催を記念するとともに、訪れた人々が記念写真を取るなど憩いの場となっている。

文化協会で日本語を学ぶ学生たちの中には、この東京オリンピックを見に行くために数年前から楽しみに日本語を勉強し始めた人がいたが、一般のアメリカ人は日本への入国もできず、その上、無観客となり残念がっていた。

オンライン日本語教師養成講座

6月3日より8週間の予定で、フランスにある天理日仏文化協会の津留田正昭会長を講師に、日本語教師養成講座がオンラインにて開講し、12名が参加した。今回の特徴はオンライン講座のため、講師はパリから教え、受講生は東海岸のみならず、中西部のシカゴ、カリフォルニアなどの西海岸やカナダのトロントからなど、さまざまな地域からの参加が可能になったことだ。パリとカリフォルニアは12時間の時差があるが、皆熱心に受講した。受講生からは、「日本語教師養成講座を受けたいと思い始めてから5年が経ち、ついにその夢が実現した。」「日本語を教える際に役に立つノウハウを多く学ぶ事ができた。この講座で学んだことを今後お道のために役立てることができるように頑張りたい」などの感想が寄せられた。

文化協会では、これからの新しい活動の一つに、アメリカ管内の教会・布教所での日本語教育をサポートしていくことを考えている。これまでの文化協会の30年を振り返るとき、日本語教育がニューヨークの地で歓迎され、地域社会への貢献につながり、人々との信頼関係を築くのにとても有用であると感じている。日本語教育のノウハウ、教材などを提供しながら、アメリカのそれぞれの場所で地域社会に溶け込み、将来の人材育成の一助となればと願っている。

ギャラリーの再開

6月8日、ギャラリーが再開し、ニューヨークの日米アーティスト・コミュニティ「SJAC」の展覧会が開催され、総勢30名のアーティストによる作品がギャラリーの壁を彩った。入場人員を定員の50パーセントに押さえながら、インスタグラムを利用したライブ配信やオンラインでのトークライブが行われ、成功裡に終えた。

文化協会での展覧会を通してニューヨークはもとより各国の様々な団体や個人と繋がりが築かれてきている。ニューヨーク日本人芸術家協会や多摩美術大学校友会ニューヨーククラブでは20年以上にわたり毎年展覧会を行っており、在ニューヨーク総領事館から大使もまた度々参加されている。

ここ数年はロシア関係の団体との繋がりが深まり、ロシア美術館、プーシキン協会、インターナショナル・アート・アライアンスなどのロシア関係の団体が毎年展覧会を開催している。現在文化協会のギャラリーを担当しているのは、天理大学ロシア学科を卒業し、ニューヨーク大学大学院でロシア文学を学んだ手塚かおりさんだ。彼女が英語とロシア語を使いながらキュレーターを担当しているのも不思議な縁を感じる。

山野内勘二大使（左）と手塚さん

その他繋がりのある主な団体は、ユダヤ美術館、台北駐ニューヨーク経済文化弁事処や台北近代美術館、アメリカ墨絵協会、アメリカ水彩画協会、ニューヨーク東京芸術大学同窓会、奈良県や青森県などの県人会など。また、毎年8月上旬にはニューヨーク平和ファンデーションと協力しながら広島・長崎原爆犠牲者追悼及び平和記念イベントが行われている。

ロシアの団体の関係者は「各国の文化センターや美術館はマンハッタンの中心地になかなか自分たちの広いスペースを持てないので、こうして素晴らしい空間を使わせていただけるのは大変ありがたい事だ」と話された。

ギャラリーの活動を通して構築された繋がりを今後どのように発展していくか課題でもある。

ニューヨーク・シルバー会

2018年6月から年に数回、高齢者を対象に茶話会のような場として「シルバー会」を開催している。この会はニューヨーク日系人会とタイアップしながら、毎回10数名が集まり、いろいろな生活の知恵や情報を交換したり、健康について気になることを質問したりしながら、楽しいひと時を過ごしている。コロナ禍においてはオンラインで継続されているが、高齢者にとって、オンラインミーティング用のZoomアプリに慣れるのが大変なことだったが、コンピューターやアプリの使い方を説明しながら途絶えることなく開催されている。

看護師の弓削容子さん（文化協会主任夫人）がコーディネーターとなり、様々な健康相談ができることも、参加者にとって貴重な機会である。最近、ペンシルベニア大学医学部のドクターも参加し、手伝っていただいている。これはオンラインならではのメリットだろう。専門家から詳しい話が聞くことができ、内容も一層充実し、信頼のおける集いの場となっている。

ニューヨーク・シルバー会

図書紹介（124）

島薗進・鎌田東二・佐久間庸和著

『グリーフケアの時代―「喪失の悲しみ」に寄り添う―』（弘文堂、2019年）

おやさと研究所教授
金子　昭 *Akira Kaneko*

死別の悲嘆（グリーフ）にある人々にどう寄り添うべきか、これがグリーフケアの課題である。言葉としては新しいが、グリーフケアは人類が昔から行ってきた、残された人々に対する支援である。古来、その主要な担い手は宗教者であった。この古くて新しいテーマが、生死の問題に向き合う我々すべての課題として、今日再び浮上してきたのである。タイトルが示す「グリーフケアの時代」とは、まさに我々の時代のことを指す。

本書は全３章からなる。上智大学グリーフケア研究所の３人のスタッフが各１章を担当し、それぞれの立場からグリーフケアの時代状況を語る。以下、各章のポイントと私なりの読みどころを紹介したい。

第１章　島薗進「現代日本人の死生観」

古来より、日本人は伝統や心情の中で自らの死生観を培ってきた。しかし、そうした伝統や心情から断絶しているのが現代であり、現代日本人の死生観にはこの断絶の痛みが見いだされる。島薗氏は、その痛みを故郷喪失と呼ぶ。グリーフワークが「死者をしのぶ思いを更新していく、終わりなき作業」だとすれば、現代日本人は故郷喪失に耐えつつ、自らの死生観をそれぞれの形で更新しているのだと言えよう。

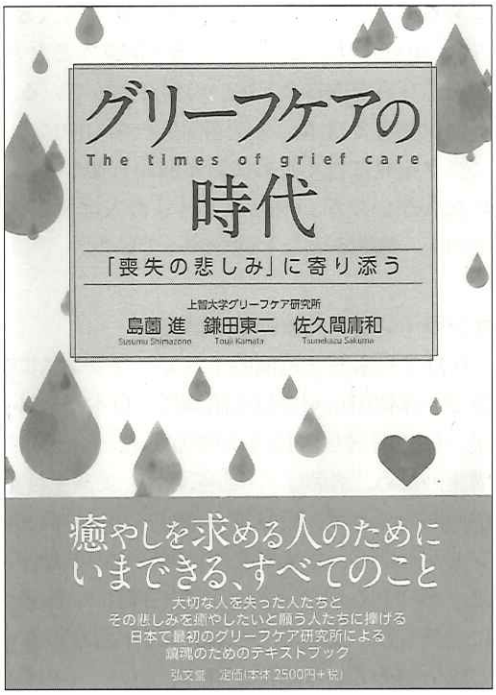
島薗氏は、この文脈の中で、新宗教を「故郷喪失の経験を持つ人々が、新たな故郷を再建する運動」だと位置付けた。その典型的な例が天理教だという。天理教では、「親神」を信じ、「親里」である“おぢば”に帰ることを信仰の要に据えているからである。また、新宗教の成長期は、童謡が人々に愛された時期と重なる。そしてその時期は、また大衆のナショナリズムの高揚期でもあった。こうした指摘から、宗教を日本人が共有する死生観の次元で見る、島薗氏の視座を窺うことができる。

第２章　鎌田東二「人は何によって生きるのか」

死は人類永遠のテーマであり、どの世界宗教も死及び死に伴う苦しみをどう安んじて受け止めたらよいかを説いてきた。鎌田氏はまず、これに対するユダヤ・キリスト教、仏教、神道の答え方を紹介する。とくに力点が置かれるのが、仏教と神道の心観であり、なかんずく神道の「安心論」である。鎌田氏によれば、神道には２種類の安心論の思想があるという。すなわち、死後の魂の行方を探究することで、心の安定を図る平田篤胤の思想と、死後世界に積極的な関心を示さず、「安心なきが安心」という態度を取る本居宣長の思想とである。鎌田氏自身は、50代を境に篤胤的な生き方から宣長的な生き方に共感的に理解できるようになったという。

鎌田氏は、それ自体は宗教的でありつつも、特定の宗教色を脱した身心変容技法に着目する。というのも、宗教とは「聖なるものとの関係に基づくトランス（超越）技術の知恵と体系」と定義されるからである。そうした身心変容技法の一例が、仏教色を排したマインドフルネス瞑想である。また東日本大震災を契機に誕生した臨床宗教師は、自宗の布教伝道をせず、相手の死生観や信仰を尊重して寄り添うことに努める、新しいタイプの宗教者だ。臨床宗教師は、宗教の境界を超えて、人々の悲嘆や苦悩に向き合う存在なのである。

第３章　佐久間庸和「グリーフケア・サポートの実践」



佐久間氏は冠婚葬祭会社の社長であり、一条真也という筆名で数多くの論考やエッセイを書いている。佐久間氏によれば、葬儀もまたグリーフケアであり、これをサポートするのが葬祭業であるという。本章では、葬儀の場での遺族への対応、また自社で葬儀を行った遺族会（無宗教形式）の組織化、そしてこれらに関連した諸々の支援（佐久間氏はそれらを纏（まと）めてグリーフケア・サポートと呼ぶ）について解説がなされる。

興味深いのは「葬祭ディレクター」という制度だ。グリーフケアとしての葬祭儀礼には相応の専門性が求められる。そこで、厚労省の認定資格制度として1996年に発足したのが葬祭ディレクターである。この認定資格には１級と２級があり、１級はすべての葬儀における相談から会場設営、式典運営に至る詳細な知識と技能が求められ、２級は個人葬における同様の知識と技能がカバーされる。資格取得には一定期間の実務経験が必要となる。この認定葬祭ディレクター資格は、葬祭業界で働く人たちの知識や技能の向上を図ると同時に、彼らの社会的地位を高めるために創設されたという。

以上３つの章を要約するならば、島薗氏は現代日本人の死生観の実相について説き起こし、鎌田氏は諸宗教の身心技法的実践について論究し、佐久間氏は葬祭業においてなされる現場サポートの実際について説明していると言えるだろう。３人の執筆者に共通するのは、特定宗教に依拠しないという意味で、いわば脱色された宗教性の中でグリーフケアが語られていることだ。もしかしたら、これが現代のグリーフケアを特徴づける性格なのかもしれない。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大の中、グリーフケアの現場は厳しい状況にある。感染防止のために最後の看取りもできず、まともな葬儀も行えないなど、遺族にとってはやり切れない思いが残ってしまう。そのため、葬儀や遺族会にオンラインを導入する試みなど、コロナ禍の中で現場ではさまざまな模索が行われている。そうしたコロナ禍にあっても、３人のメッセージはグリーフケアの基本中の基本に関わるものであり、本書はグリーフケアを考えるに当たって、押さえておくべき必須のテキストだと言えるのである。

天理台湾学会第30回研究大会、オンラインで開催

金子　昭

天理台湾学会（会長・金子昭）の第30回研究大会が7月3日、オンライン方式で開催された。同大会は、昨年7月に「第30回記念研究大会」として天理大学で開催予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大という事態のため、やむなく昨年の開催は中止、延期となった。今回もコロナの影響のため、大会の規模を縮小し、「記念」という言葉も取って、「第30回研究大会」としてオンライン開催という形となった。日本と台湾から約60名が参加した。

大会では5名の研究発表、そして記念講演が行われた。金子は「台湾社会におけるジェンダー意識の高揚と仏教尼僧の活躍―昭慧法師による社会活動事例を通して」と題して発表。昭慧法師（2021年度庭野平和賞を受賞）の思想と事績について、とくにジェンダー平等の観点から報告を行った。コメンテーターは劉靈均・相模女子大学講師が務めた。

記念講演の部では、「台湾文学・台湾原住民文学の現在」と題して、林淇瀅・国立台北教育大学名誉教授による「為台灣歴史和土地書寫―我的後殖民創作心路（台湾の歴史と土地のために執筆する―ポストコロニアル時代における我が創作姿勢）」、楊翠・国立東華大学教授による「兩條回家的路―台灣原住民女性文學的豐富圖景與研究心路（二つの帰路―台湾先住民族女性文学の豊かな光景と研究姿勢）」の二つの講演が中国語で行われた。

第3回East Asian Society for the Scientific Study of Religion (EASSSR：宗教の科学的研究のための東アジア学会）で発表

堀内　みどり

標記学会の年次大会が、韓国のJeju National University（済州大学）が担当校となり、7月16日～18日の日程で、リモートと対面で行われた。開会式及び大会の記念講演と閉会式はYouTubeで配信され、研究発表はオンライン・ミーティングを使用しての開催となった。大会のテーマは「Religion and Peace in East Asia: The Roles of Religion in Times of Crises」（東アジアの宗教と平和：危機の時代における宗教の役割）で、堀内はDaejin大学のLee教授が企画した「East Asian New Religious Movements: Beyond the Basics」（東アジアにおける新宗教運動：既成概念を超えて）に参加し、「"Caring" and Social Activities by Religious Bodies: A Case Study of a Local Tenrikyo Church（宗教団体による「ケア」と社会活動：天理教の一地方教会の活動を通して）と題して発表した。虐待児童を減らし、虐待事象を減少させたいと取り組んでいる教会長の活動と理念を紹介しつつ、天理教の教会が社会資本として社会の中で活用できるのではないかというこの教会長の提言を参考に、全国に散在する天理教の支部よりも、より小さくまとまった地域範囲における活動が、現前する社会の課題に対応可能な役割を果たせる可能性があることを述べた。系統を超えた連携、知識の共有、地域特有の問題（課題）への協力的アプローチなどを共通の認識とする必要がある。このパネルでは、他に、大巡真理会（Daesoon）、一貫道（Yiguandao）、及びカオダイ教の教義及び活動についての発題が行われた。

第341回研究報告会（7月21日）「資料読解の試み―『特高月報』、『思想月報』に見る天理教」

金子　昭

昭和初期の天理教は、戦時体制の下、国家から厳しい監視と干渉が行われていた。その様態を克明に伝える文書が『特高月報』（内務省警保局刊行）と『思想月報』（司法省刑事局刊行）である。これらの文書は当時、当局により極秘扱いにされたが、戦後になって復刻版で刊行されている。本発表では、そこに掲載された天理教についての記述を紹介しながら、当時の国家権力が天理教をどのように見ていたかを報告した。

天理教に対する当局の眼差しが急に厳しくなるのは、昭和12年頃からである。それは「天理本道」問題の余波を受けたところが大きい。この前後から、特高警察による監視が厳格なものになってくる。昭和13年12月、天理教は「諭達第8号」を発布し、いわゆる「革新」の時代に入る。しかし、その後も教団への監視は続いた。「革新」がその通り実行されているかどうか、思想検事が教会本部に聞き取り調査に入るなど、国はたえず天理教の動向に注意を払っていたのである。天理教にとって、昭和初期のこの時代は、明治中期と並ぶ過酷な迫害・受難の時代であった。

『グローカル天理』メール配信のご案内

当研究所では、『グローカル天理』を毎月発行し、関係各所やご希望の方々へ配布・配送しておりますが、ペーパーレスでのメール配信を開始しました。

つきましては、『グローカル天理』（PDF版）のメールでの受け取りを希望される場合、および紙版の『グローカル天理』の配布・配送を中止される場合は、下記の当研究所メールアドレスへご連絡ください。

なお、当誌はおやさと研究所のホームページでも公開しており、そちらでご覧いただくことも可能ですので、併せてご案内いたします。

皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

連絡先：
天理大学 おやさと研究所『グローカル天理』編集部
E-Mail: glocal@sta.tenri-u.ac.jp
URL: https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html

天理大学おやさと研究所

2021年度公開教学講座のご案内

―信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ（7）―

【開催趣旨】

教祖のご在世時、道の先人たちは教祖から直接聞いたお言葉をしっかりと心に治め、生涯、自ら信仰を生きる心の指針としました。そうした教祖の逸話は、世代を超えて語り伝えられ、お道の信仰の支えになっています。

この公開教学講座では、『稿本天理教教祖伝逸話篇』における教祖の逸話を手がかりとして、お道の信仰世界の一端を明らかにしたいと思います。そこでテーマは、昨年度に引き続き、「信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ」シリーズの7回目といたしました。

なお、今年度の公開教学講座は、9月はオンライン、10月以降は対面での開催の可能性があります。詳細は追ってご案内いたします。

第1回（9月1日オンライン配信開始）
永尾教昭所長　110話「魂は生き通し」

第2回（10月25日）
金子昭研究員　127話「東京々々、長崎」

第3回（11月25日）
尾上貴行研究員　130話「小さな埃は」

第4回（12月25日）
澤井治郎研究員　138話「物は大切に」

第5回（1月25日）
島田勝巳研究員　123話「人がめどか」

第6回（2月25日）
澤井義次研究員　115話「おたすけを一条に」

第1回公開教学講座は9月1日よりYoutubeにて配信予定です。
視聴方法については、本誌9月号及びおやさと研究所ホームページに掲載いたします。

グローカル天理
第22巻　第9号　（通巻261号）
2021年（令和3年）9月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　永尾教昭
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan